

審査結果の要旨

氏名 周 延蒼

本論文は、〈教〉〈育〉〈學〉〈校〉〈師〉などの漢字文化圏で教育についての基本語彙となっている単語ないし文字が、元来どういう意味を持つものとしてつくられ、変遷し、今日に至っているかということ、語源學、字源學、人類学などの手法を駆使しながら明らかにしたものである。論文は、小篆だけでなく甲骨文字や金文（青銅器の文字）までをも対象として扱ってこれらの字や語の発生的な意味を探るとともに、その後の多くの歴史的文献にあたりながら、その意味の変遷を明らかにした、希有な研究である。

論文は序章と本論四章それに終章という構成で、関連した内容の補論が添付されている。序論ではこれまで「教育」という語の語源的意味として理解されてきた内容はほとんど厳密な考察を経たものでないこと、従ってまちがって理解されていることを指摘し、次章以降の課題を明らかにしている。一章では〈教〉の語源を甲骨文字や歴史文献に探り、この語が、元来農作や戦勝のための占いの意として始まり、その記録を体系化したものを指していたこと、また国家がその結果を天の啓示として庶民大衆に広めることを指していたことが明らかにされている。〈教〉は必然、「神道」と不可分になり、戒律や礼という規制の成員への教化を意味するようになっていく。二章では、〈教〉の担い手としての〈師〉の意味が探られ、①部族の呪術的・軍事的指導者②その抽象化としての道徳の模範、崇拜対象③国家の指導者の分身としての役人④芸能、呪術的技能者という四つの意味類型が析出されている。三章では〈教〉の場としての〈學〉と〈校〉の語源が追究されていて、〈校〉はもともと余った食料を貯蔵する米倉のことを指しており、原始部族の最も重要な場であり、また長期保存のための食料保存技術の伝承の場でもあったこと、他方〈學〉は宗教施設で、天や靈を守るための〈教〉の場であったことを導いている。四章では〈育〉という語について、この字はもともと出産を意味していたが、次第にその担い手が女性から男性集団に移行していった様が叙述され、〈育〉は子どもの象徴的な死と男性による再生という神秘的、秘教的な色彩を帯びた営みとして、国家が行う〈教〉と対抗する原理となっていたこと分析されている。

教育基本語彙の語源的、文明史的な分析という手法による研究は、これまでほとんどないといってよい。この論文の成果によって、これまでの通説が一部修正されなければならないことは間違いなく、その点で貢献度の高い論文である。文明史的に叙述する際に採用している枠組に一部精緻さに欠ける部分があることや甲骨文字の読みとりにも異説があり得ることなど、今後よりつめることを期待したい箇所はあるが、それらは本論文の貢献度やオリジナリティを損なうものではない。

以上によって、本論文は博士論文にふさわしいものと判定された。